

C. F.マイアー『聖者』における

語り手としての弩師ハンス (II)

馬 場 紀 臣

Der Armbruster Hans als Erzähler
in C. F. Meyers Novelle „Der Heilige“ (II)

Toshiomi BABA

Abstract

Die Innengeschichte von dem Konflikt zwischen dem König Heinrich und seinem Kanzler Thomas Becket erzählt Hans in der Ich-Form. Dabei ist die Perspektive des erzählenden Ich viel stärker als die des erlebenden Ich. Daher bekommt die Innenerzählung auch einen Charakter der Autobiographie von Hans. Dann erlangt die Hilde-Episode, die anscheinend unnötig ist, große Bedeutung. Warum wirkte das Tüchlein mit dem Blute des heiligen Thomas, das dem Gerücht nach Wunderkraft hat, für Hans am Sterbebett Hildes keine Wundertat? Hans sah die menschliche Seite von dem König Heinrich und dem Kanzler Thomas. Die beiden waren für Hans der Mensch Heinrich und der Mensch Thomas Becket. Deswegen geschah für ihn kein Wunder. Nur wer Thomas als einen Heiligen betrachtet, der kann Wundertaten erleben. Thomas Becket in der Innengeschichte ist der Mensch Thomas Becket. Es ist auch die Geschichte vom Menschen Thomas Becket, um die Herr Burkhard den Armbruster Hans in der Rahmenhandlung bat. Deshalb können wir sagen, daß Hans dem Herrn Burkhard dessen Bitte erfüllte, aber er hat sie übererfüllt.

8

C. F.マイアーの『聖者』¹⁾は外枠と外枠の語り手との関係でみると三人称形式であり、ハンスと枠内物語の関係で言えば一人称形式である。外枠の語り手について、ウーヴェ・ベーカーは、「マイアーの語り手は決して自分の登場人物の[心の]中を覗き込まない。彼は専ら登場人物たちの外面的状況に身を置くだけである。語り手は自分の想像力の助けを借りて、場所と時間並びに弩師の習慣を再構築することによって、既に過ぎ去ったことが語り現在の瞬間に起こっているかのようなイリュージョンをつくる。」と言い、さらに「語り手は絶えず二つのパースペクティヴの間を揺れ動いている。自分が話す物語の結末を知っている人のパースペクティヴと、ここと今を初めて体験する何も知らない見物人のパースペクティヴの間を。」と述べている。²⁾ ベーカーは外枠の語り手は作中人物の心の中へ入って行かないと言っているが、例えば、次の箇所はブルクハルト氏に話を乞われ、困惑するハンスの心中を表していると思われる。

Offenbar schien ihm billig, den Wunsch seines Gastfreundes zu erfüllen; aber ungerne tat er es. Denn jene Ereignisse, staunenswert und unbegreiflich nicht nur für die Fernstehenden, sondern auch für die Mithandelnden, waren der wichtigste Teil seiner eigenen Geschichte, die es dem verschlossenen Manne zu erzählen schwer wurde, und griffen in Tiefen seiner Seele hinunter, wo sein Empfinden zwiespältig wurde und seine Gedanken wie vor einem Abgrunde stehen blieben. (15)

(「親切なる主の望みをかなえてやることは、彼にも、無論、当然なことだと思われた。が、気が進まなかった。というのは、例の事件は、局外者には勿論のこと、直接それに関係した者にとっても、腑に落ちない、目をみはるような出来事だったが、これは、彼自身の生涯からいっても、最も重大な事件であり、それを人に話すなぞということは、この無口な男にとって容易ならぬことだったし、また、そのために彼は魂の奥底までもゆり動かされて、感情は乱れ、考えは奈落の縁に立たされているような観があったのだ。」)
(19,20)

1) テキストは Conrad Ferdinand MEYER: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. v. Hans Zeller und Alfred Zäch. Bd. 13. Bern: Benteli 1962. S. 5-147.を使用する。なお、テキストの訳文、訳語は伊藤武雄訳(『聖者』 岩波書店 昭和十七年)を使用させていただく。ただし、適宜、多少変更させていただいた。引用文の末尾の括弧内の数字はそれぞれの頁を表す。

2) Uwe BÖKER: C. F. Meyers „Der Heilige“. Die Bedeutung der Erzählhaltung für die Interpretation der Novelle. In: Studia neophil., 39. 1967. S.60-79., S.66.

さらには、ハンスの話の主要部分を聞き終えた直後のブルクハルト氏の心境やその部分まで語り終えたハンスの心理状態の叙述³⁾は、やはり外枠の語り手が両者の胸中へ入ると見るのが妥当であろう。少なくとも外面からのみの描写とは言い難い。

ノーマン・フリードマンは、論文『小説における視点』の中で語りのパースペクティブについて、編集者的全知 (Editorial Omniscience)、中立的全知 (Neutral Omniscience)、目撃者としての「私」 („I“ as Witness)、主人公としての「私」 („I“ as Protagonist)、多元的選択的全知 (Multiple Selective Omniscience)、選択的全知 (Selective Omniscience)、ドラマ的方法 (The Dramatic Mode)、カメラ (The Camera) という八つの方法を挙げている。⁴⁾

彼によれば、編集者的全知の本質的特徴は、ストーリーと直接関係があるかもしれないし、ないかもしれない人生、風習、道德についての作者の意見の押し付けと一般的考察であり、作者が自分の作中人物たちの心中で起こることを報告するのみならず、それを批評するということは、編集者的態度の自然な帰結である。編集者的全知から、ただ作者の直接の干渉 (個人的注釈) がなくなった場合が中立的全知である。著者は非個性的に三人称で話す。⁵⁾

『聖者』の外枠の語り手は編集者的全知のように個性的に自己の意見を開陳して前面へ歩み出てくることはないが、ハンスの習慣 (「というのはこの旅人は、クリスマスと大晦日との間にチューリヒを訪れるのを例としていたからだ。」) (6) < [...] denn der Reisende hatte die Gewohnheit, Zürich zwischen Weihnachten und Jahresende heimzusuchen. > (7)) や性格 (「弩師のハンスは儉約家だったから」) (11) < [...] denn Hans der Armbruster war ein sparsamer Mann. > (10)) などを知っている。⁶⁾ フリードマンの分類に従えば中立的全知の立場を取っていると言うことができるであろう。

枠内物語は、ヘンリ王と国璽尚書トマス・ベケットという二人の主人公の葛藤を最も間近で見た弩師ハンスが語るものであるから、明らかに、「目撃者としての『私』」の方法である。フリードマンはこの方法についておおよそ次のように述べている。

3) ブルクハルト師の心境、ハンスの心理状態の叙述は箇所はそれぞれ本稿21頁、17, 18頁に別の関連で引用してあるので参照されたい。

4) Vgl. Norman FRIEDMAN: Point of View in Fiction. In: Publications of the Modern Language Association of America LXX. 1955. S.1160-1184.

5) Vgl. ebd., S.1169-1174.

6) Vgl. U. BÖKER: a.a.O., S.65.

目撃者である語り手はストーリーそのものの独自の権利を持った人物であり、多かれ少なかれ筋に関与し、多かれ少なかれその筋の主要人物たちと懇意である。読者には彼は一人称で話す。この語り形式の当然の帰結は、目撃者は他者の精神的状態に対して通常の近づき方以上の近づき方は持っていないということである。したがって、この形式の目印は、作者が他のすべての関与した人物に関して自分の全知を完全に放棄してしまい、目撃者をして読者に、観察者として合法的に発見し得ることだけを伝えさせることを好む、ということである。読者に提供されているのは、ただ目撃者としての語り手の思考、感情、及び表象だけである。それゆえ彼はストーリーを、こう言い得るであろうが、動き得る周辺から考察している。目撃者が読者に合法的に伝えることができるのは、最初に思われるかも知れないのとは違って、制限されていない。彼はストーリーの中の様々な人々と話すことができ、重要な問題についての彼らの見解を求めて得ることができる。とりわけ彼は主役自身との会話をすることができる。そして最後に、彼は、もしかすると他人の精神的状態を覗き見ることを許すかも知れない手紙、日記、及びその他の文書をわがものとし得る。極端な場合には、他人がどう感じ、どう考えるか推論し得る。⁷⁾

『聖者』における目撃者としてのハンスは二人の主人公に対して絶好の位置にいる。弩の献上を切っ掛けとしてヘンリ王の腹心の部下となり、アラビアの知識を通じて国璽尚書の信頼を得る。絶えずヘンリ王の身辺に侍り、したがって王の最高の寵臣である国璽尚書とも接する機会に頻繁に恵まれる。両者に深く信頼されているので重要な二人の対話の場からも遠ざけられることはない。例えば、榎の木の下での対話の場面では、「王はあたしの忠誠を知っておられたので、あたしの前を憚るというようなことは、ついぞありませんでした。トマス殿の方はあたしなぞ無視していましたが、時たまあたしの方に眼をそそぐことがあっても、そのまなざしには悪意なぞ微塵もありませんでした。それはかつてグレースの棺の傍であたしが口にしたコーランの句が、彼の気に入り彼を慰めたからでした。というわけで、あたしは、人間の常識では到底信じられないような驚くべき対話の傍聴人になったのです […]」(124,125) (Der König kannte meine Treue und war gewohnt, meiner wegen sich keinen Zwang anzutun, und Herr Thomas sah über mich hinweg, oder wann er mir einen Blick schenkte, war es kein unfreundlicher, denn jener von mir neben Gnades Sarg gesprochene Koranvers hatte ihm gefallen und wohlgetan. So

7) 以上、この段落の叙述は N. FRIEDMAN: a.a.O., S.1174f.による。

war ich Zeuge eines wunderbaren und dem Menschenverstand unglaublichen Gespräches [...] (73)) と語られている。また、平素は決して見ることのできない国璽尚書の心の葛藤をも覗き見る機会を得る。例えば、トマスが控えの間の片隅の大きな木の磔刑像の前で呟く、「……禿鷹の如くにわたしの心を蝕む、消しがたい怨恨を追い払われよ。……わたしも御身の先蹤になりたいからだ。……わたしは生けるもののの中の最も不幸な最も悲惨な者だ。」(132) (... Verscheuche den Geier des unversöhnlichen Grams, der mein Herz verzehrt! ... Damit ich in deine Stapfen trete ... Ich bin der Ärmste und Elendeste der Sterblichen ... (77)) という言葉を耳にし、ハンスはその怨恨の念を払拭しきれぬ心底、真情を知ることができる。

フリードマンは、ストーリーそのもののの中でその下位に置かれた役割ゆえに、目撃者としての語り手は、中心的に行為に関与している本来の主役よりも著しく動的であり、したがってもっと範囲の広い多彩な情報源を持っている、とも述べている⁸⁾が、確かにハンスは王やトマスと比べるとはるかに動的であり、われわれに筋の葛藤点の理解のための知識や情報を伝えてくれる。

ところで、一人称形式の語りの場合、「主役としての私」か「目撃者としての私」という区分のほか、より根本的なものとして「体験する私」と「語る私」という二つのパースペクティヴの問題がある。小説における語りの媒介性を起点として、「語り状況」という概念を提唱し、小説の類型学を企てたフランツ・シュタンツェルは著書『小説における典型的語り状況』の中で一人称小説ではハーマン・メルヴィルの『白鯨』を例としてその語り状況を分析している。その際、シュタンツェルは次の四つの観点から考察している。

- 「1. 語る私は人物という点では体験する私と同一〔人物〕である。
2. 語り行為における語る私は体験する私と筋に対して時間的後位の関係にある。語り距離は物語の中で表示される。
3. 語り距離が物語られたものの筋の時間的長さより大きいときには〔＝語り行為の時点で物語られる出来事が終結してしまっているときには〕、語る私は生起にひとつの完結したものとして向かい合っている。その場合には語る私は語られるべき筋の全体を前もって知っているという特権を意のままにできる。この理由から、語る私はパノラマのような概観へ高まり得、筋の部分的解決あるいは結末への見通しを与えることができる。

8) 以上、この段落の叙述は ebd., S.1174.による。

4. 体験する私によるひとつの出来事の体験と、語る私——体験する私に対して、より大きな洞察、成熟によって、追想と省察への傾向によって、そして完全に変わった生き方によっても抜きんでていることが稀でない語る私——によるその同じ体験の、物語としての再形成との間には、この体験の評価と解釈の相違がある。それは小説の意味構造において再び明らかになる。」

シュタンツェルはもちろん、「これで、どの一人称小説においてもその実現を目差して努力しなければならない要求が唱えられているのではないということ、ここで長々と述べることは余計なことに思われる。この四点ではただ解釈にヒント——それらの観点に従ってひとつの一人称小説がその独自の構造を顧慮して研究され得るヒント——が与えられるに過ぎないのである」⁹⁾と述べているが、以下においてわれわれは、このシュタンツェルの四点を念頭において、『聖者』におけるハンスの語りについて考察してみたい。

9

冒頭の外枠でのハンスとブルクハルト師との対話の場面の重要な機能のひとつが、ハンスが枠内物語の語り手として適格であるという資格確認であることについては既に前稿で扱った。ハンス自身も枠内物語において自分の経歴を語る際、ヘンリ王とトマス・ベケットとの葛藤の物語の語り手として自分がいかに相応しく、適任であるかを裏づける。王宮へ入るまでの彼の経歴はまさにそのために話されている。オンデルデリンデンは「作者が、世界史をつくる二人の男の闘いを、第三者、共に体験し観察する者、しかし決して出来事の前面に立っていない者、の見地から描き出そうと思うなら、この語り手は自分をこの職務に相応しいものとして証明しなければならなかった——そしてこれがまさしくこの第二枠で行われる。」と的確に指摘した後、「絶えず語り手の資格の証明をする必要性が、語り手が一人称の物語において主要な役割を果たしている」と一人称の語り手一般について述べている。¹⁾

9) Franz STANZEL: Die typischen Erzählsituationen im Roman. Dargestellt an „Tom Jones“, „Moby-Dick“, „The Ambassadors“, „Ulysses“ u.a. Wien u. Stuttgart: W. Braumüller 1955. S.70f.

1) Sjaak ONDERDERINDEN: Die Rahmenerzählungen Conrad Ferdinand Meyers. Leiden: Universitaire Pers 1974. S.24.

ヘンリ王と国璽尚書にどのようにして気に入られたか、その一例は既に先に挙げたが、「あたしの方も、悪巧みをこらして阿るような真似こそしませんでした、せっかく向いて来た運を、下手に立ち回って取り逃がしてしまわない程度の才覚は、十分に身につけるようになっていました。」(54) ([...]und wenn ich mich auch nicht mit bösen Listen einschmeichelte, war ich doch witzig genug geworden, um mir mein gutes Spiel nicht täppisch zu verderben. (34,35)) と、この好位置を確保できた自分の才覚や、「もっとも、それにはあたしにとって有利な原因が三つありました。あたしがノルマン人でもサクソン人でもなかったこと、王以外の何人からも贈物をうけなかったこと——但し国璽尚書だけは例外で、この人には何かを断わるなぞということは誰にも出来ないことです、時と場合によっては、受けもしましたが——もう一つは、ことさら阿呆の真似をしたというわけではありませんが、本来の自分よりも幾分単純な人間らしく見せかけ、経験に蓋をかぶせて、幾分世間知らずらしく見せかけていたことです。そういうわけで、ヘンリ王はあたしのシュヴァーベン人らしい忠誠に好感をもたれたのでした。」(54,55) (Dreierlei aber kam mir dabei zugute: daß ich weder Normanne noch Sachse war, daß ich von niemandem als meinem Herrn Miet' und Gabe nahm - einzig den Kanzler, dem keiner etwas weigern durfte, zu Zeiten und unter Umständen ausgenommen - und daß ich, ohne gerade den dummen Hans zu spielen, mich etwas einfältiger stellte, als ich von Natur war, und etwas neuer, als mich die Erfahrung gelassen hatte. Dergestalt fand Herr Heinrich ein Wohlgefallen an meiner schwäbischen Treuherzigkeit.(35)) と、そのための有利な条件を挙げたりする。

このようにして、語り手としての資格確認を得る努力と連繫しているのが、物語られる出来事の情報をつかいて得たか、いかにしてその出来事の現場に居合わせたか、その理由づけである。これは別の言葉で言えば、先ほどのシュタンツェルの言う、体験する私と語る私の同一性の問題である。

作者を装った語り手が前面に登場する三人称形式の小説では登場人物の世界と語り手の世界はそれぞれ次元が違ふ世界であり、作者を装った語り手は神のごとき存在であるから、主人公が知らないことはもちろん、作中人物たちの誰もが知らないどんなことであれ、知っていても少しも不思議なことではない。むしろ、知っているのが当たり前、いわゆる「全知」なのである。一人称小説においてこの語り手の役割を担うのは語る私であるが、三人称小説の語り手との決定的な相違は、語る私と体験する私が同一人物であり、両者が同じ世界の人

物であるという点である。語る私は神のごとき存在ではない。したがって、理論上は、物語の第一の出典は筋の現場で体験する私の目と耳、体験する私が見たり、聞いたりして得た出来事、情報である。第二は、物語られる出来事の後、いわゆる語り距離だけ離れた時間の間に得た語る私の情報、知識である。²⁾

ウェールター・シルズは、「イギリスの宮廷でのハンスの地位は、彼が実際に重要な出合いや話し合いのすべてに居合わせるように選択されている（そして彼の性格、彼の素性及びそれ以前の彼の経験によって上手く動機づけられている）。」³⁾と、オンデルデリンデンは、「弩師の行動の総体は次のことに向けられている。すなわち、彼に再三再四好都合な観察者の位置を作るということである。彼があらゆる決定的な事件の際に驚くほど常に居合わせることを幾分信ずるに足るように思わせるために、その位置について彼は彼の物語において再三再四動機づけをしなければならない。」⁴⁾と、それぞれ述べているが、『聖者』の枠内物語においては殆どの重要な場面において、体験する私のハンスはその現場に居合わせる。そしてハンスの目を通して出来事は描写される。その際、語る私は、何よりもまず、体験するハンスがどうしてその場面に居合わせていたか、居合わせることが出来たか、その理由、根拠づけに腐心する。

例えば、魔女の件では、「こんなに洗いざらい正直にお話してしまったのですから、お聖人にも、国璽尚書が魔女の所へ行った時には、あたしも腹心の家来というわけで、お供をして行ったことが、お分かりになるでしょう。」(64) (Ihr sehet nun, Herr, denn ich habe es in meiner Ehrlichkeit an den Tag gelegt, daß der Kanzler, als er die Hexe besuchte, mich als einen verlässlichen Mann hatte mitreiten lassen.(40))と説明されている。さらに一例を加えると、ハンスがトマスの殉教の場面となる大司教の館へ入る際には、「それからあたしは裏通りを抜けて、堅固な大司教の館へ辿りつきました。其處では、あたしは王の下部でもあり、イギリス中に顔が売っていたものですから、なんの面倒もなく、いや、まるで地獄に仏とでも言ったように、喜んで迎え入れられたのでした。」(221) (Dann schlüpfte ich durch Seitengäßchen und erreichte das feste erzbischöfliche Haus, wo sie mich als Königsknecht und eine in

2) Vgl. Franz K. STANZEL: Theorie des Erzählens. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1985. S.119-124. (前田彰一訳『物語の構造—＜語り＞の理論とテキスト分析』 岩波書店 1989年, S.75-79.)

3) Walter SILZ: Meyer, „Der Heilige“. In: Deutsche Erzählungen von Wieland bis Kafka. Interpretationen. Hrsg. v. Jost Schilemeit. Frankfurt a. M. und Hamburg 1966 (= Fischer Bücherei, Band 721) S.260-283., S.263.

4) S. ONDERDERINDEN: a.a.O., S.77.

Engelland wohlbekannte Person ohne Schwierigkeit, ja beretwillig wie einen Nothelfer, einlieBen.(129)) と、妨害されることなく入れた理由が知られる。

体験する私としてのハンスがその現場に居合わせない所で起こる出来事については、その情報源が明らかにされる（「あたしは信すべき筋からこういう話を聞かされていました [...]」(175) <Es wurde mir von glaubwürdigen Zeugen versichert [...].> (102)）。噂も一つの情報源である（「——噂によると、彼 [= 当時のローマ法王] は或る僧院にいたのを拔擢されて、法王の椅子につけられたそうですが、一生涯、現世のことにも自分の職務のことにも重きをおかず、理解もしていなかったとのことでした——」(113) <- sie sagen, man habe ihn aus einem Kloster hervorgezogen, um ihn auf den Thron zu setzen, und er hätte zeit seines Lebens nicht viel von der Welt und ihren Geschäften gehalten und begriffen -> (67)）。

現場に居合わせたり、そうでないときには筋の世界の人物から情報を得たりして、いずれにせよ、フィクションとしての辻褄は合っている。体験する私としてのハンスが見聞する以外のこと、及びその後の語りの時点まで語る私が得た知識や情報以外、語る私は、作者を装った語り手とは違って、神のように知ることはない。体験する私と語る私の同一性は首尾一貫して保たれ、破綻することはない。

10

外枠においても枠内物語においてもいくつかの時の陳述がなされている。そのうちの最も重要な陳述は、物語の冒頭のハンスがツューリヒ市に到着した場面で外枠の語り手が、「これは千百九十一年が将に終ろうとする三日前のことだった」(6) (Es war der drittletzte Tag des Jahres der Gnade 1191 [...] .(7))、と年月日をはっきりと伝えている。これによって、ハンスがブルクハルト師にヘンリ王と国璽尚書トマスの物語を語る時点が判明する。すなわち、一人称形式の枠内物語の語る私の「今」、語る行為の時が確定される。

さらに、語り手ハンスはトマスが一人の補祭から促されて礼拝堂へ向かう時点で、話を一瞬中断し、暖炉棚の上の砂時計を見て、最後の砂粒が上のガラスから下のガラスへ落ちて行った後、上下のガラスの位置をかえて、「今日で丁度一年です。トマス殿が最後にお勤めに行かれたのは、午後の今の時間でした。」

(230) (Heute jährt es sich, und es war zu dieser Stunde des Nachmittags, daß Herr Thomas seinen letzten Gang antrat.(134)) と言う。トマス・ベケットの死は1170年である¹⁾から、まさしく彼の死から丁度21年後に語っているのである。

また、外枠の語り手によってブルクハルト師のハンスに対する次の言葉が伝えられている。「『ほほう』とブルクハルト師が口をはさんだ。『それが、十何年の間ヘンリ王の腰巾着になって、威丈高に馬をのりまわしていた男の言う言葉だろうか。』」(35) („Oho!“ unterbrach Herr Burkhard. „Ist das Rede eines Mannes, der ein halbes Menschenalter hinter Herrn Heinrich getracht und stolziert hat?“ (24))ブルクハルト師のこの言葉からハンスがヘンリ王に仕えた時間的長さが「十何年」間であったことが判明する。

ハンスはヘンリ王に仕えた「十何年」のうち、グレースの死とトマスの大司教就任とその死に焦点を当ててヘンリ王とトマスの葛藤を語る。トマスの死から数えると、語り距離は21年である。体験する私と語る私の間の時間的距離は、枠内物語の核筋のトマスの死の時点とハンスがトマスの死を語る語り行為の時点で、21年というわけである。その時点で語る私は体験する私に21年の時間的後位の関係にある。オンデルデリンデンは、マイアーの『護符』における語り現在への逆戻りの箇所について、「その箇所では報告者をまだ書き記している際に捕らえる感情が物語られた過去における状況の不気味さを強めようとする。語り現在と語られた過去の間の時間的距離についての意識を働かせるこの作用は、『聖者』においても、繰り返されて、それを目差して努力されている。」と述べ、「それから、毎日々々悲しい日が続きました。その頃のことを思い返すと、今でも胸が張りさけそうです。その当時は、とてもそういう悲しみには堪え切れそうもないようにおもわれました。」(47,48) (Nun folgten jammervolle Tage, an die ich noch heute nur mit Bitterkeit zurückdenke; damals glaubte ich sie kaum zu überstehn.(31)) と「だから、ごらんなさい、彼 [=獅子の心リチャード] は、血気に逸った所業のために、現在は下の方のオーストリアで監禁の身の上です。」(68,69) ([...] wie er denn auch zu dieser laufenden Stunde für eine Tat seines jähren Blutes unten in Österreich eingetürmt liegt. (42)) の二箇所を例として挙げている。²⁾なお、リチャードのこの監禁は、史実によれば、十字軍遠征からの帰還の途上の出来事であった。³⁾

1) Vgl.『岩波 西洋人名辞典』 増補版 岩波書店 1981年, S.1295.

2) S. ONDERDERINDEN: a.a.O., S.37.

3) Vgl.『岩波 西洋人名辞典』, S.1641.

11

シュタンツェルは、作者を装った語り手中心の語り状況、作中人物に反映した語り状況、一人称の語り状況という三つの典型的な語り状況を挙げ、それぞれの語り状況が支配的な小説を作者を装った語り手中心の小説、作中人物に反映した小説、一人称の小説と呼び、三つの小説の典型的形式としている。彼によれば、これらの典型的小説は互いに隔絶しているのではなく、連なって円環を成している。一人称小説のうち、語る私が支配的となり、語り経過をはっきりと目立たせ、語る私と体験する私を認識させ得る語り距離によって互いに分離する形式では、一人称小説は作者を装った語り手中心の小説の語り状況へ連なり、語り行為、語り距離、語る私が本文に示されない形式では、一人称小説は作中人物に反映した小説の語り状況へ近づく。¹⁾

『聖者』の枠内物語とその一人称の語り手ハンスとの関係においては、全体的に見て、語る私の介入が非常に目立つと言い得るであろう。例えば、語りの基本のひとつである奪取 (Raffung) の仕方においても圧倒的に語り行為を意識させるものである。奪取の種類はレムメルトによれば、ギュンター・ミュラーが分けた継起的奪取 (die sukzessive R.) と反復的・持続的奪取 (die iterativ-durative R.) のほか、折衷的 (eklektisch) 奪取がある。継起的奪取は語られた時間の方向へ前進する出来事の配列であり、その基本定式は「それから…そしてそれから」 („Dann... und dann“) である。奪取の強度によって「われ来たり、見たり、勝ちたり」という文体で時間を掴み出しながら語る跳躍的奪取 (Sprungraffung) と出来事 (生起) に多かれ少なかれ間断なく従い、「時間合致の語り方」(語られる時間と語る時間の合致) に近づく逐一的奪取 (Schrittraffung) に分けられる。反復的・持続的奪取は個々の、規則的に繰り返される出来事 (反復的) あるいはその期間 (Zeitraum) 全体にわたって持続する一般的な事実 (持続的) の陳述によって多かれ少なかれ長い時間 (Zeitraum) を総括する。反復的と持続的の両形式は密接に絡み合わされて現れるのが稀でなく、落ち着いた状態性を説明するという同じ基本的傾向 (性向) をもっているのも、一つのカテゴリーにまとめられる。両形式の基本定式は「この期間に再三再四…」 („Immer wieder in dieser Zeit ...“) あるいは「この期間中ずっと…」 („Die ganze Zeit hindurch ...“) である。継起的奪取と反復的・持続的奪取は結合し

1) 以上、この段落の叙述は F. STANZEL: Die typischen Erzählsituationen im Roman. S.69.による。

て現れる場合が折衷的奪取である。これは「全体の代わりに部分」という原則に従って語る。基本定式は「例えば…が起こった」 („So geschah es zum Beispiel ...“)、あるいは「この期間にあるとき…が起こった」 („In dieser Zeit geschah es einmal ...“) である。²⁾

『聖者』の枠内物語の前話 a (第三章)、b (第四章) では跳躍的奪取、反復的一持続的奪取、あるいは折衷的奪取が目立つ。前話 a の最初の段階でハンス自身の若い頃の話は、貴族の生まれだという出生から始まり、早いテンポで語られて行く、「それからあたしは足の速いのを幸い、樹の茂った山を越え、大きく弓形にうねっているライン河を一直線に横切って、エルザスさして急ぎました。」 (25) (So genoß ich denn meiner raschen Füße wieder und eilte durch das Waldgebirg dem Elsaß zu, den großen Bogen des Rheines mit einer geraden Linie abschneidend.(19)) と継起的奪取の特徴的表現も含まれている。二三の場面中心的提示に近い部分もあるが、全体としては前話 a はパノラマ的提示が強い。「その当時、あたしはよく、サラセンの飛び道具よりももっと遠くまで飛ぶ、弩や矢を作り上げた夢を見たものですが […]」 (29) (Oft hab' ich damals im Traume eine Armbrust gebaut und einen Bolzen gebildet, die noch weiter trugen als das sarazenische Schießzeug [...] (21)) とか、「そして毎晩、日没の赤い雲を望んでは、魂の憧れの地である、奇跡の市グラナダを幻に描いていましたが […]」 (30) ([...] erblickte [ich] jeden Abend in den roten Wolken des Sonnenniederganges die Wunderstadt Granada, wohin mich meine Seele zog [...] (21))、さらに「あたしはこの異教徒の市に三年いました。毎日タタが、仕事と追いかけて過ぎてゆきました。そして夜になると […]。ある時あたしはその男の口から、一つの話、日頃の話に比べて優り劣りのないような一つの話、聞かされました。」 (32) (Drei Jahre verblieb ich in der Heidenstadt, die Tage verflogen mir im Wettlaufe der Arbeit, und an den Abenden [...]. Dort vernahm ich einmal aus dem Munde eines braunen, glutäugigen Burschen [...] eine Geschichte, nicht besser und nicht schlechter als seine übrigen [...].(22)) などと反復的一持続的奪取や折衷的奪取の典型的表現が見られる。

前話 b においても同じように反復的一持続的奪取、折衷的奪取が殆どである。前話 a では奪取の配列力としてまだ時間がある程度力を及ぼしていたが、前話

2) 以上、この段落の叙述は Eberhard LÄMMERT: Bauformen des Erzählens. Zweite, durchgesehene Aufl. Stuttgart: J.B.Metzler 1967. S.83f.による。

bにおいては主題的配列が目立ってくる。ヘンリ王について、国璽尚書について、王妃エレオノールについて、そして四人の王子についてハンスは順序よく語っている。主題的配列は語る私の語り行為を明白に意識させる。

オンデルデリンデンは、「彼 [=ハンス] の報告は、一面では、少し複雑な一人称の物語である。しかし、他面、決定的な中間の部分では、彼は<視点>の技法を使っている。この技法は一人称の物語を作中人物に反映する物語に相当近づかせる。」³⁾と論じているが、核筋になると、場面中心のあるいはそれに近い提示は確かに多くなる。だが、それらの提示の前には物語相毎に、「ある日」(72) (Eines Tages(44))、「この冒険が始まってから、月は一度盈ちてまた虚けてゆきました。そのうちに或る日 [...]」(78) (Der Mond hatte gewechselt seit Beginn dieses Abenteuers, als eines Tages [...] .(47))などと体験する私と語る私の間の語り距離を感じさせる表現の仕方がある。もちろん、反復的・持続的奪取もなされる。例えば、王が初めてグレースの森の小城へ行き、帰った後、

Das war der Anfang. Aber von der Sonnenwende jenes Jahres bis zu seinen fallenden Blättern habe ich den König oft durch jenen friedlichen Forst begleitet und den Ritt häufiger noch allein gemacht, um seinen Besuch anzusagen oder die Zeichen seiner brünstigen Liebe, seltene Perlen des Meeres und was der Erdenschoß Kostbares gibt, seiner verborgenen Buhle zu überbringen. Ohne daß ich diese je erblickt oder den Burghof betreten hätte! Nur an der Pforte verkehrte ich mit dem alten Äscher, der freilich jedesmal, wenn er meiner ansichtig wurde, erbärmlich seufzte, aber weder den Gehorsam weigerte, noch je zurückwies, was aus der königlichen Hand auf seine Seite fiel.(47)

(「これがそもそもの初まりでした。が、その年の夏至から木の葉の落ちる頃までの間に、あたしは王のお供をして何度この平和な森を通ったか分かりません。またそれよりももっと頻繁に、ひとりで其處を通って、王の訪れの前触れをしたり、或はまた、王の熱烈な愛情のしるしである、珍しい海の真珠だの、そのほか地中から掘り出される高価な宝石なぞを、秘密の愛人のところへ届けたりしました。ただし、婦人には一度も逢ったことはありませんし、城の庭へ入ったこともありませんでした。いつも門の所で年よりのエッシャーを相手にするだけでしたが、彼は勿論、あたしの顔を見る度に気の毒なくらい溜息をもらしました、とはいっても、服従を拒むとか、王の手から授けられるものをしりぞけるとかしたことは、一度もありませんでした。)」(77)

3) S. ONDERDERINDEN: a.a.O., S.116.

と語られている。

前話においてもそうであるが、核筋の提示の際にも、比較的場面中心的提示の最中にも外枠の語り行為を思い出させる言葉が挿入されている。例えば、やはりグレースの城へ向かうトマスの場面中心的提示に近い提示の際にも「——お聖人は、あの尊い血をうけた盃の伝説を御存知でしょうな、とろけるような楽の音と一緒に天から降って来て、モンサルヴァッチュの山上にとどまったという。——」(81) (- Ihr kennt die Mär von dem Kelch mit dem kostbaren Blute, der, unter süßem Getön vom Himmel sinkend, auf Montsalvatsch sich niedergelassen hat? - (49)) と、語り手ハンスが聞き手のブルクハルト師に質している。ちなみに、枠内物語においてハンスのブルクハルト師へのこのような呼び掛けは40回程度行われている。

オンデルデリンデンは、呼び掛けの形式がただ人称代名詞としてのみ現れるところでは、目立たないが、繰り返しによって、外枠の状況の意識の保持という点で非常に有効な支えとなっており、「お聖人」(„Herr“, „lieber Herr“, „ehrwürdiger Herr“)の場合には、普通、普通の種類の金言と結びつけられるか、あるいは、語り手がたった今報告したものの中から引き出す要約と結論と結びつけられている、と述べている。いずれにせよ、ストーリーの「その箇所の重要性を追加的に強調する」呼び掛け形式の作用は大きな効果を果たしている。⁴⁾

このような呼び掛けの形式を含め、ハンスは枠内物語に頻繁に介入するのであるが、それらは、上記の機能のほか、様々な作用を果たしている。ブルクハルト師、すなわち読者のためのストーリーの理解を助けるためのもの(「お聖人は事の真相を知りたいとお望みでしょうか。／実は、イギリス国王の権力と慈悲深い教会の権利との双方に、傷をつけずに、それらを保証してゆく妥協的な方式もなかったわけではなく、国璽尚書の才をもってすればそれは発見できただろうと、あたしは考えています。王は決して人間味のない方ではありませんでしたし、トマスも後先見ずの熱狂家ではありませんでしたから。ただ、この二人の心はもはや離ればなれになっていたのです、そしてお互いに最後の一步を近づけようと思っても、過去の愛情の亡霊が、蒼ざめた敵意となって、彼らの間に割り込んで来るのでした。」(171,172) <Wollt Ihr die Wahrheit erfahren? / Eine vermittelnde Formel, welche die englische Königsmacht und die Rechte der barmherzigen Kirche zu gleichen Teilen geschont und gesichert

4) Vgl. ebd., S.36.

hätte, wäre schon vorhanden und der Klugheit des Kanzlers erfindlich gewesen, wie ich meine. War doch der König nicht unmenschlich und Thomas kein erhitzter Eiferer! Aber die Herzen der beiden Herren kannten sich nicht mehr, und wann sie den letzten Schritt zueinander tun wollten, trat das Gespenst ihrer gestorbenen Liebe als blasse Feindschaft zwischen sie.> (100)等)、とりわけ頻繁な、出来事の真実性の強調⁵⁾(「あたしが今お話ししていることは、過去の事実なのです。」(109) <Ich erzähle Euch eben die Sache, wie sie war.> (65)、 「——あたしはその名をもうはっきり覚えていませんが、そうかといって、お聖人には何一つ、どんな些細なことでも、本当でないことは申し上げたくありませんからな——」(138) <- ich bin der Namen nicht mehr sicher und möchte Euch um nichts in der Welt, auch nur in einer Kleinigkeit, das Unwahre sagen -> (81)等)、また、シュタンツェルの第3点、筋の部分的解決あるいは結末への見通し、すなわちストーリーの未来の予示(「あたしはただ、王の気紛れとしか考えられない行為を、心ひそかに興味をもって眺めていただけでした。それだのにあたしはとうとう恐ろしい愚行のまきぞえを喰ってしまいました。ヘンリ王はそのため王冠も生命も、そのうえ——気の毒なことには——魂の救いさえも失ってしまわれました。」(79,80) <In der Stille meiner Gedanken ergötzte mich ein Tun, das ich für einen fürstlichen Mutwillen hielt; aber ich verwickelte mich in einen Greuel und in eine Torheit, die Herrn Heinrich die Krone, das Leben und - wehe - seiner Seele Seligkeit gekostet hat.> (48)等)、出来事の経緯の不明⁶⁾(「ノルマン人のマレルブが、さらって行った娘に飽きがきて、自分の意志で家へ返してよこしたもののなのか、それとも国璽尚書がひそかに彼の上に圧迫を加えたもののなのか、その辺のことは、あたしにはとうとう分からずじまいでした。」(48) <Ich habe nie erfahren, ob der Normanne Malherbe seine Gefangene freiwillig zurückgab, weil er ihrer müde geworden, oder ob der Kanzler in seiner verborgenen Weise einen Druck auf ihn ausgeübt hatte.> (31))、言葉の意味を解しえないこと(「この言葉の意味は、とうとうあたしには分からずじまいでした。が、察するところ、トマス殿は高邁な哲理をいだいていたために、サタンの技を信じなかったのだ、と考えるよりほかはありません。」(63) <Diese Rede habe ich nie verstanden; aber ich muß vermuten, daß Herr Thomas in

5) Vgl. U. BÖKER: a.a.O., S.71.

6) Vgl. W. SILZ: a.a.O., S.268.

hochmütiger Philosophie nicht an die Künste Satans glaubte.> (39))、さらに、忘れてならない語り手ハンスの弁解や後悔の念の表出(「なんという哀れな愚物だったでしょう、あたしは。」(76) <Ich elender Tor!> (46)、「こんな塩梅で、あたしはこの不信の行為がさほど恐ろしいこととも思われず、まして危険などは全くないものと考えていました。」(80) <Dergestalt gewährte ich in diesem Verrate wenig Übel und keine Gefahr.> (49)等)、などがある。

シュタンツェルの第4点、体験する私から21年を経た語る私としてのハンスの成熟⁷⁾を思わせる表現は随所に見られるが、最も代表的なのは次の箇所であろう。

Es kommt, o Herr, beim Urteilen wie beim Schießen lediglich auf den Standpunkt an. Damals, mitten unter den Sachsen lebend, drückte ich mich beiseite oder zog die Mütze, wann ein Zug Normannen auf ihren gepanzerten Rossen vorübersprengte. Hernach, als ich selber droben saß, hätte es meine Ehre nicht gelitten, mich von einem Sachsen anders als barhaupt ansprechen zu lassen. Jetzt, da Sachsen und Normannen für mich verblichene Bilder sind, habe ich, nebst der Weisheit meiner grauen Haare, einen mittleren und mäßigen Stand und spreche: Macht und Eroberung sind von Gott gesetzt, und da die Normannen schärferes Blut und ungestümere Geister haben, so sind sie die Herrscher. Aber derselbe Gott hat Knechtsgestalt angenommen und uns alle mit seinem treuern Blute gekauft: darum mache der Herr sein Gesinde nicht bitter und vergreife sich nicht an dem Weibe und Kinde seines Knechts! (24, 25)

(「それは、お聖人、判断というものも射的と同じことで専ら立場々々によって違って来ますからな。その当時、サクソン人の真中で暮らしていた頃は、あたしも片隅の方にひっこんで、ノルマン人が、武装した馬に跨って、行列を作って疾駆してゆく時には、帽子を脱いだものでした。が、その後、自分の方が馬に乗るような身分になると、サクソン人から脱帽もせずに話しかけられでもしようものなら、今度はあたしの体面が承知しなかったからでしょうからな。現在では、サクソン人やノルマン人の影も、目の前から薄れてしまい、あたしはこの白髪頭の思慮分別ばかりではなく、中所のほどほどな身分職業も持っているのですから、今の考えを言えば、こうも言えましょうか。権力とか征服とかいうものは、神の定めたもうたものであって、ノルマン人には、他のぬきんでた鋭い血と激しい気迫とがあったればこそ、支配者にもなったのだ。が、一方では、その同じ神が下部の姿になられて、尊い血で、あたし達すべてのものの罪をあがなわれたのだから、人の主たるものはけっして下々の怨みを買ってはならない、下部の妻や子供をけがしてはならない、

7) Vgl. S. ONDERDERINDEN: a.a.O., S.111.

と。』) (35,36)

また、ハンスのこの成熟は外枠の語り手によっても確言される。

Der Armbruster hatte sich mit funkelnden Augen auf seinem Schemel aufgerichtet. Seine Erzählung hatte ihn erleichtert wie eine Beichte und in allen Muskeln gestärkt; denn er besaß trotz seiner grauen Haare ein tapferes Herz, das die harten Sprüche der in den menschlichen Dingen verborgenen Gerechtigkeit ertragen konnte. (139)

(「弩師は目を輝かして、腰掛の上に真直ぐに坐っていた。物語をすませたので、懺悔した後のように心が軽くなり、四肢五体に力が漲って来たのだ。というのは、彼は髪こそ白くなっていたが、人間界の出来事の中にひそんでいる正義の厳しい宣告を堪え忍んでゆけるだけの、凛々しい心を持っていたからである。』) (239)

枠内物語の「こんがらがった、底の知れないような事件」(19) (schwere, unerforschliche Geschichten(14)) をハンスは一人称の語り状況で、語る私のパースペクティヴを重用して語っている。語る私の報告が基調であって、対話の箇所も、場面中心的な提示の箇所も、語る私のパースペクティヴに溶け込んでいると言い得るであろう。前稿で見た通り、多数の様々な未来の予示が行われているが、読者は『僧の婚礼』や『ユルク・イエナッチュ』の場合ほどには作中人物化しない。これも枠内物語の語り手ハンスの語りが、このように語る私の色彩が強いものになっているからであろう。それによって読者は、絶えず出来事に対する時間的距離の遠さを意識させられるからである。「仮面を被り、距離を置くというこの本能的な欲求は、マイアーにとっては、彼がその点においてドイツのノヴェレ作家の中で最大の巨匠となった枠の技法を発達させる強力な推進力であった」⁸⁾ とシルズが言っているが、マイアーは枠形式にすることによってストーリーの過度の生々しさを和らげる。特に、『聖者』においては、やはり前稿で述べたように、その枠が三重になっているが、その上さらに語る私の語りを読者に絶えず意識させることによってもう一段階ストーリーの出来事を語り現在から遠ざけている。読者は枠内物語の出来事に対して時間的距離をさらに感じさせられるのである。

ところで、ハンス自身、「あたしのみじめな一生は、すくなくともこの老耄れ頭で考えたところでは、聖者と王との生涯から切り離すわけにはいかないからです。」(22) ([...] mein armer Lebenslauf läßt sich von dem des Heiligen

8) W. SILZ: a.a.O., S.263.

und des Königs nicht trennen, wenigstens in meinem alten Kopfe nicht.(17))
と、ヘンリ王とトマスの生涯との自分自身の生涯との一体性を説いているが、シルズも、「ハンスが報告しなければならないことは、本質的には彼自身の生涯の歴史である」⁹⁾と述べている。語る私のパースペクティブの圧倒的な支配によって、枠内物語が自伝的色彩を帯びてくる。先に見たように物語の内容と体験するハンスの立場からして、語るハンスの方には、当然、反省と懺悔の態度が窺える。まさにハンスの枠内物語は、ヘンリ王とトマス・ベケットの葛藤の物語であると同時に、彼の半生の物語でもあり、彼の弁明、懺悔の物語でもある。

12

枠内物語の語り手弩師ハンスの自叙伝、懺悔の物語という観点に立つてこの枠内物語を見直してみると、単なるエピソードに見えるヒルデに関するエピソードが非常に重要な意味を持ってくる。ハンスとヒルデとの関係と関連してハンスとヘンリ王、とりわけハンスとトマスとの関係がまず考察されねばならない。

ハンスの見方が正鵠を射ているかどうかは別として、ハンスはある期間トマス・ベケットの聖者性を信じていなかったのではないかという疑問が生ずる。ハンスは「十何年」仕えたヘンリ王と国璽尚書・大司教トマスの葛藤を語ったのであるが、「侍僕にとって英雄はない」(Für einen Kammerdiener gibt es keinen Helden)¹⁾と諺に言われるように、ハンスが語ったのは、王ヘンリ、国璽尚書トマス・ベケットではなく、ひとりの人間ヘンリであり、ひとりの人間トマス・ベケットであった。ヘンリ王のあまりにも人間的側面を見て、知り過ぎてしまったハンスは王としてのヘンリにとっては不要となる。それどころか、むしろ邪魔者となってしまふ。だからこそハンスは宮廷を去らねばならなくなる。国璽尚書としてのトマス・ベケットも、ハンスはその表面の国璽尚書としての顔の裏面に人間トマス・ベケットを見る。ひとり娘のグレースを宝物として大切にかくまい、それを奪った者を心の底では決して許してはいない。だが、その真情を表面には決して出そうとしない。ハンスだけが偶然の機会に何度か苦悩する人間ベケット、父親ベケットを垣間見る。

9) Ebd.

1) 野本祥治『ドイツの諺』 第9版 郁文堂 1961年, S.59.

ところで、ハンスの生涯にとってヘンリ王、トマス・ベケット、その娘にして王の愛人グレース以外には、個人として最も大切に思う者は親方の娘ヒルデであった。ヘンリ王の許を辞した後、ハンスは病の床に臥したヒルデを訪ねる。彼は彼女を妻として迎えたいと願うほどである（「彼女の病気が治りさえすれば、自分は彼女を正式の妻として故郷へ連れ帰りたいと申し出ました。彼女はうなずきました。」(244) < [...] ich ihr vorschlug, [...] sie als mein angetrautes Weib mit mir heimzuführen, wenn sie nur gesunden könnte. Sie nickte[...]. > (142)）。

枠内物語は、自己の生涯をヘンリ王とトマスから切り離しては考えられない語り手ハンスの自叙伝でもあるという点から考察すると、一見不要に思われるこのハンスとヒルデとの再会と別離の場面は、決して無くてもよいものではなく、それどころか必要不可欠のものであることが明らかになる。ハンスとマレルブにとってのヒルデ筋は、単にヘンリ王とトマス・ベケットにとってのグレース筋の対照的筋としての機能だけではない。ヒルデは弩師ハンスの自叙伝のヒロインなのである。ヘンリ王もトマスもその掌中の珠とも言うべきグレースを失う。ハンスも最愛のヒルデを失ってしまう。三者とも奪われた者たちである。

ここから、血の付いた布切れも作品解釈の際重要な意味を持ってくる。ハンスは親方の家から、すなわち、ヒルデの許を去ることによって宮廷で王や国璽尚書に寵愛された。宮廷の王の許を辞して初めて、彼は再びヒルデに会う。ヒルデの病床を見舞ったハンスは、瀕死の彼女を救おうと、仕舞い込んでいたあのベケットの血の付いた布切れを取りに行ってくる。奇跡を起こしたと言われた布切れをヒルデにあてがうが、奇跡は起こらず、逆にヒルデは死んでしまう。この時のハンスの心中は、「驚きと怒りとが腹の底からこみ上げて来ました、死人さえも呼び醒す筈のトマス殿は、執念深くあたしを苦しめあたしの愛するものを殺したのです。」(245) (Da faßte mich ein grimmiger Schreck und Zorn, daß Herr Thomas, der die Toten auferwecke, mich unversöhnlich verfolge und mir mein Liebes töte.(143)) と語られている。

冒頭の外枠ではブルクハルト師によって火事を止めた聖トーマの奇跡が伝えられているのに対して、多数の奇跡を起こしたベケットの血の付いた布切れはなぜハンスのために奇跡を起こさないのか。これは単なる偶然ではなかろう。人間的側面を見過ぎ、ベケットを人間としてみたハンスのためには奇跡は起こらないのである。ベケットの奇跡と呼ぶのは彼を真に聖者と信じる人々に対してのみである。このとき驚き、怒りが腹の底からこみ上げてきたハンスが、聖

者トマスの名を彼の「お手製のカレンダー」(251) (in meinen selbstgefertigten Kalender(146))に書き込むのは、ヘンリ王とトマスの葛藤、トマスの死、そしてヘンリ王の許を辞して、時が経ち、やっと、トマスが聖者に列せられたという噂を聞いてからである。

われわれは前稿において、ハンスの語る枠内物語の全体的解釈の際、外枠の語りの状況、すなわち、ツューリッヒの町の一方でルツェルンの僧侶が女性信者たちを相手に聖者トマス・ベケットの奇跡を語り、もう一方で一介の弩師ハンスがトマス・ベケットの実像を語るという構図が重要であると指摘しておいた。トマス・ベケットの実像とは、人間トマス・ベケット、父親トマス・ベケットである。ハンスの枠内物語の大きな方向（大筋）は外枠の状況によっても予示されていたのである。

ところで「ルツェルンの僧侶が向こうの尼寺で、尼公どのを前にして、まことしやかにまくし立てている事柄や、尼公どのが、魂の糧にとわたしに貸し与えられた例の羊皮紙の中に記されている事柄とは、全く毛色のちがった話」(17) (ganz andere Dinge, als der Luzernerpfaffe unserer gnädigen Frau drüben im Stift aufbindet oder als in dem Pergamente stehen, das mir die edle Herrin zur Gesundung meiner Seele geliehen hat.(13)) を聞きたいと言って、ハンスに聖トマスの話を懇望したブルクハルト師は、獅子の心リチャードがヘンリ王との血縁を断ち、ヘンリ王が気を失って倒れた時点で、ハンスの話を断ち切る。外枠の語り手は、「ブルクハルト師は朗かな面白い話が好きだった、もっともそれは、僅かな余命をたのしんでいる高齢の老人にはありがちのことだが。彼が弩師を部屋へ連れこんだのも、聖者の生涯に起った二三の挿話なり人間味のある話なりを聞いて、皮肉な笑いを浮べたり、新しい聖者の金色の後光に——謙虚を愛する彼のことから——少しばかり影をつけてやろうぐらいの下心があってのことだった。ところがハンスが目の前に描いて見せたものは、苦悩にみたされた戦いと苦痛にゆがんだ二人の人間の顔だった、こういう印象は到底彼の忍びうるところではなかった。で、彼はその印象を薄めるために、話を茶化すよううまい文句はないだろうかと考えた。」(238,239) (Herr Burkhard liebte das Heitere und Ergötzliche, wie das hohe Alter pflegt, das nur noch einen letzten Rest des Lebens zu genießen hat. Als er den Armbruster in sein Gemach zog, war es ihm darum zu tun gewesen, ein paar Geschichten und Menschlichkeiten aus dem Leben des Heiligen zu belächeln und das Gold des neuen Heiligenscheines - der Bescheidenheit zulieb - ein wenig zu schwärzen. Hans aber hatte ihm einen qualvollen Kampf und zwei

schmerzverzogene Menschenangesichter gezeigt, und diesem Eindrucke war er nicht gewachsen. Er suchte nach einem Scherzworte, um ihn abzustumpfen. (139)) とブルクハルト師の心境を報告している。確かに、ヘンリ王とトマスの葛藤は苦悩に満ちた深刻なものであったが、ブルクハルト師も、結局は、ハンスに人間トマス・ベケットの話を期待したのであり、したがって、師の願いは叶えられたと言い得るのではなかろうか。むしろ、過度に叶えられたと言う方がより適切であろう。先に挙げた人間トマスを思わせる場面のほか、グレースの死を悲しむ場面や、『『そんなことを言ったとすれば』とトマス殿は厳かに答えました、『それはわたしが馬鹿だったのだ、お前をひいき目で見ただけ、父親の至らなさだったのだ。』』(97) („Sprach ich so“, erwiderte Herr Thomas ernsthaft, „so sprach ich töricht und beirrt von meinem väterlichen Wohlgefallen an dir.“(58)) というトマスの言葉、「それからもう一つの疑問は、トマス殿がグレースに、彼のお気に入り、リチャードのことを話し、そして恐らく一時は、娘をヘンリ王の宮廷に差し出して、王妃の誉れを得させようなどという、罪深い野心に耽けったことでした。」(100) (Weiter gab es mir zu denken, daß Herr Thomas Gnade von seinem Liebling Richard erzählt und sich also wohl eine Weile in dem sträflichen Ehrgeiz gewiegt hatte, sein Kind an Herrn Heinrichs Hof und zu fürstlichen Ehren zu bringen. (59)) と言われている野心などは、実にひとりの人間、ひとりの父親を思わせるものである。

おわりに

ベーカーの言う通り、なるほどハンスは現実には精通することに、現実の把握に、失敗したかも知れない。¹⁾しかし、その掴みきれなかった部分が謎として残り、逆に作品の魅力となっているのではないか。オンデルデリンデンが結論づけているように、「弩師ハンスは可能な限りの最高の語り手であると言わざるを得ない。なんと言っても目に見える語り手を必要とする枠物語の根本の形式から出発するなら。」²⁾と言い得るであろう。謎的なものは謎的なものとしてそのまま残され、それがむしろ主要人物や出来事に、したがって作品に奥行き、深みを与えている。ただし、語り手としては絶好の位置にいて、ヘンリ王と国璽

1) Vgl. U. BÖKER: a.a.O., S.79.

2) Vgl. S. ONDERDERINDEN: a.a.O., S.110.

尚書トマス・ベケットの葛藤の物語の語り手として最高の語り手と評されるハンスも、ヘンリ王やトマス・ベケットの悲劇性とは比ぶべくもないが、ひとりの人間ハンスとしてはやはり悲劇の人である。